

戦雲篇

映画文学人生論

- 026) 敵中横断三百里 山中峯太郎 監督：森一生
027) 真空地帯 野間宏 監督：山本薩夫
028) 野火 大岡昇平 監督：市川崑
029) 細雪 谷崎潤一郎 監督：市川崑
030) 墨東綺譚 永井荷風 監督：新藤兼人

あやまちはくりかえします秋の暮

戦争というと三橋敏雄のこの俳句が浮かんでくる。あやまちは二度とくりかえしませんという人もいるが、あまりあてにはならない。

今回、戦争文学として選んだのは次の五篇。

敵中横断三百里	山中峯太郎	森一生
真空地帯	野間宏	山本薩夫
野火	大岡昇平	市川崑
細雪	谷崎潤一郎	市川崑
墨東綺譚	永井荷風	新藤兼人

大きく分けると、戦意昂揚文学、反戦文学、逃避文学となる。このうち戦前から戦中にかけてよく読まれたのは、『敵中横断三百里』。日露戦争の手柄話で、昭和五年に少年倶楽部に連載され、十五年戦争で出征する運命の少年たちの戦意昂揚に貢献した。

『真空地帯』と『野火』は戦後になってから発表された反戦文学で、戦後の反戦ブームに乗り、ベストセラーになっているが、戦時中のレジスタンス文学ではない。治安維持法、国家総動員法などによって著作物がきびしく検閲されていれば、レジスタンス文学は発表できない。

逃避文学の代表は『細雪』と『墨東奇譚』。

『細雪』は昭和十七年、「中央公論」への連載がはじまった。蒔岡家四姉妹の日常生活を描いただ



戦雲篇

映画文学人生論

けの小説だが、「内容が戦時にそぐわない」という理由で掲載中止になった。作品が完成、出版されたのは戦後の昭和二十三年である。

「内容が戦時にそぐわない」という点では『墨東綺談』も同類だと思うが、昭和十二年の日中戦争勃発直前の発表のせいか、こちらはおとがめなし。荷風の日記『断腸亭日乗』によれば、荷風作の花柳小説『腕くらべ』の岩波文庫版は昭和十九年九月に軍部の注文で五千部重版されている。

花柳小説が売れて戦争の恩恵をこうむった荷風は面従腹背で、日記には次のように書いている。

「政府は今年の春より歌舞伎芝居と花柳界の営業を禁止しながら半年を出でずして花柳小説と銘を打ちたる拙著の重版をなさしめこれを出征軍の兵士に贈ることを許可す。何らの滑稽ぞや」（昭和十九年九月二十日）。

「日米戦争は畢竟軍人の腹を肥やすに過ぎず」「戦乱を好む事はこの国民の特質なるべし」という記述もある。

もちろん、戦時中にこんな日記を公表したら非国民として投獄される。荷風はおもてむきは花柳小説作家として世間をあざむき、反戦文学作家としてのホンは日記のかたちで残した。

戦意昂扬文学か、反戦文学か、逃避文学か——作家はいつの時代にも選択を迫られている。

ミッドウエー尊王攘夷玉砕す